

『とはすがたり』の歌語表現の反復について

——いつまで草・なるみ・心の色——

高木 周

はじめに

『とはすがたり』には一定の表現の反復が多く、特に和歌に関する表現、歌語や引歌がしばしばくり返される。一部の歌語につき、その反復によって二条と後深草院の契りを追懐する表現性が指摘^{〔1〕}されているが、多くの歌語は大意と関連する用例が注釈されるにとどまる。

歌語を執拗なまでにくり出すことは、二条の身の上の表現といかに結びつくだろうか。個々の歌語は他の作品で用いられて一定の表現の傾向を有するが、それを『とはすがたり』が反復する時、二条の生涯を語る固有の表現へと変容することを捉える必要がある。

本稿では、「いつまで草」「なるみ」「心の色」という歌語

の表現性を明らかにする。三つの歌語は、院を始めとする人々と二条のえにしを示す表現として重要である。併せて、これらの歌語に関する鎌倉期までの和歌や関連作品の表現史を跡づけ、その影響をおさえつつ『とはすがたり』独特の表現性を説明したい。

一

ただにもなきなどおぼしめされて後は、ことにあはれどもかけさせおはしますさま、何も、「いつまで草の」とのみおぼゆるに、御匣殿さへ、この六月に産するとて失せたまひにしも、人の上かはと恐ろしきに、大納言の病のやう、つひにはかばかしからじと見ゆれば、「何となるみの」とのみ嘆きつつ、(後略)

右は巻一の「いつまで草」の第一の例である。後深草院が皇子を懐妊した二条をいたわって「あはれ」を示すが、二条は「いつまで草の」と感じたという。この表現に関する諸注は「いつまで続くことやら」という不安・疑問と解するか、「いつまでも続くように」という願望と解する。「いつまで草」は和歌・物語に用例があり、結論からいえば、疑問表現として「いつまで続くか」と解すべき例、または「いつまでも続かない」という反語の含みがある例のいずれかであり、願望と解せる例はない。現存する最も早い時期の和歌は、諸注にも引く『堀河百首』雑廿首「山家」(異伝歌³52)の藤原公実の詠である。

かべに生ふるいつまで草のいつまでかかれず問ふべき
しの原の里

「いつまで草」がいつまで枯れないか不安なように、篠原の里にいつまで人の訪れが続くかと心細い山里の風情を表す。この例からすると、『とはずがたり』の「いつまで草」は、院の寵愛が「いつまで続くのか」という危惧を表すと解するべきであろう。

『枕草子』「草は」(角川文庫六三段)は「いつまで草」のありかたをよく示す。

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げに頼もしからず。

いつまで草は、またはかなくあはれなり。岸の額よりも、これは崩れやすからむかし。まことの石灰などに、え生ひずやあらむと思ふぞ、わるき。

「いつまで草」は「はかなく」「岸の額」に生えるあやふ草よりも「崩れやすからむ」ものとされる。「岸の額」は『和漢朗詠集』無常・羅維「観身岸額離根草 論命江頭不繫舟」をふまえており、脆い「いつまで草」は無常を観じさせる草として語られている。

無常を象徴する「いつまで草」は中世和歌でも詠われることが多い。『新古今集』雑下¹⁷⁸⁹皇嘉門院、

なにとかやかべにおふなる草の名よそれにもたぐふわが身なりけり

は無常歌群に配されており、いつまで草のようにわが命もいつまでも続かないという無常観を表す。同様に『続古今集』哀傷「虫のなくをききて」¹⁴²¹雅成親王、

かべにおふる草のなかなるきりぎりすいつまで露の身をやどすらん

も、いつまで草に宿るきりぎりすと同じくはかない露命を思う無常観の表現である。⁴

『とはずがたり』の前掲場面では、御匣殿(後深草院の女房、久明親王の母)が御産で亡くなったように二条も出産で死

ぬ恐れを抱き、父も死に至る病勢であることを嘆く。その記述の前に用いられる「いつまで草」は、『枕草子』や和歌と同じく無常観の表現でもあるだろう。

「いつまで草」の歌は無常に限らず恋の不安を表す例も稀少ながら存する。『久安百首』恋廿首¹⁰⁷⁵待賢門院堀河、夢ばかりおもはぬ人はかべにおふるいつまで草のいつまでかみむ

は、冷たい恋人といつまで逢えるかという不安を表し、契りの持続性を疑う点は、院の寵を危ぶむ二条の心と通じるだろう。

『とはすがたり』の「いつまで草の」という表現は、右の『堀河百首』『久安百首』以外の和歌や後述する物語にもみられ、直接の典拠を限定しがたい。広く和歌・物語によつて培われた「いつまで草」のイメージをふまえた表現として解釈することとする。

『とはすがたり』注釈⁵では『栄花物語』や『苔の衣』に「いつまで草」の例があることが指摘されているが、その表現性の検討や『とはすがたり』との比較はなされていない。

『栄花物語』には堀河女御、延子に関わる二例の「いつまで草」がある。

①高松殿におはしましたれば、たとしへなきことども多

かり。こたみの絶え間いとこよなし。女御今はただ、この嘆きは、わが身のなからんのみぞ絶ゆべきと、御心一つにとなしかうなし、「いつまで草の」とのみ思し乱る。
(卷十三ゆふしで)

②堀河の女御殿は、ただ「いつまで草の」とのみ、あはれにものを思して明かし暮らしたまふ。院もおろかならず思しきこえさせたまふことも、しばしこそあれ、男の御心、やうやう月日ごろ隔たりゆくままには、うとくこそなりまさらせたまへ(後略)

(卷十四あさみどり)

①は小一条院が道長女の寛子と結婚し、延子の所へ通つてこなくなる場面である。延子が夫の心変わりの嘆きは死ぬまで絶えないと胸を痛める局面で「いつまで草」が語られる。②は①と同様の例であり、小一条院の「男の御心」が移ろい、延子とはますます疎遠になってゆくさまを語る。『栄花物語』諸注は「いつまで草の」は引歌とおぼしいが、『栄花物語』よりも早い例は未詳とする。『堀河百首』の例を挙げ、①の「いつまで草の」を「この嘆きはいつまで続くことだろうか」の意と解する⁶。また、『枕草子』を挙げ、「崩れやすい壁に生えるので、頼りないとする。小一条院に頼ることのできない自身をたとえた」と解する注もある⁷。

延子は夫の変心の後に嘆き、二条は主の変心を予め危ぶむという差はあるが、「いつまで草」が心変わりに関わる点は共通する。延子は夫の変心に悩むうちに病に臥せり急死する（巻十六もとのしづく）。「いつまで草」と共に語られた延子像は命の無常を觀じさせ、二条が自らと父の死を恐れたと通じする。

『栄花物語』と同様の用例が『吾の衣』にもある。『吾の衣』秋の巻では、吾の衣の大將は北の方と相思相愛であったが、帝の意向で弘徽殿の宮が大將に降嫁することが決まる。降嫁を夫から告げられた北の方は、「何事も「いつまで草」とのみかりそめに思ひ給ひつつ病にもなりぬ」と、今までの夫婦仲はいつまでも続かないとはかなみ、病臥する。同場面の北の方の内語によれば、北の方への大將の愛情が深いことは弁えているが、大將が宮に通うようになれば二人の妻の間で心を勞し、北の方も二人きりの夫婦仲が崩れることが心細いという。その後北の方は急逝し、大將はそれを嘆いて遁世、降嫁は実現しない。

夫に新しい妻が現れ、元來の妻が世をはかなみ、急死するという点は『栄花物語』に等しい。「いつまで草」が夫婦仲の定めなさと、それを嘆く妻の命の無常を表す点が通底する⁸⁾。

二

物語の女君たちは「いつまで草」の表現に伴って夫婦仲の変化と急死が語られたのに対し、二条はその後も生き続け、院の変心を危ぶみつつも仕え続けるさまが、同表現の反復によって独自に描かれる。

第二の「いつまで草」は巻一の大宮院と後深草院の母子対面の場面にも見える。後深草院は二条をその亡き父母の「形見」として庇護して宮仕えをさせる旨を大宮院に告げ、大宮院も賛同して二条に恩情をかける。

（大宮院）「まことに、（二条を）いかが御覽じ放ちさぶらふべき。宮仕ひはまた、し馴れたる人こそ、しばしもさぶらはぬは、便りなきことにてこそ」など申させたまひて、「何事も心置かず、我にこそ」など、情けあるさまにうけたまはるも、「いつまで草の」とのみおぼゆ。

宮仕えのより所である主がたの恩顧を「いつまで草」と疑い、宮仕えがいつまでも続かない恐れを語り、後の院の変心（巻三）を予感させる。

主君の寵への疑いは、二条の父、源雅忠の遺戒（巻一）と関わるだろう。

思ふによらぬ世のならひ、もし君にも世にも恨みもあ

り、世に住む力なくは、急ぎて真の道に入りて、わが後生をも助かり、二つの親の恩をも送り、一つ蓮の縁と祈るべし。世に捨てられ、便りなしとて、また異君にも仕へ、もしはいかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き跡なりとも不孝の身と思ふべし。

雅忠は院への出仕に遺恨が生じれば出家せよといい、二条が「世に捨てられ」、院に寵されなくなる場合を想定する。主君の恩顧を疑う「いつまで草」表現は、父が教えた主従関係の定めなさを覚悟して院に仕える二条の態度を示している。

卷三にも「いつまで草」に準じる表現が見いだせる。有明の月の子を懐妊した二条が身を潜める四条大宮の乳母の家に、院が見舞いに来た場面である。

荒れにけるむぐらの宿の板廂さすが離れぬ心地こそすれ
(院)

とあるも、いつまでと心細くて、

あはれとて訪はるることもいつまでと思へば悲し
庭の蓬生 (二条)

見舞いの翌朝の院の歌は、荒廃した宿で会った二条に對し、有明の月との仲が取り沙汰されているとはいえ、離れ

がたい情愛を改めて感じたと告げる。二条の返歌は、院の「あはれ」も「いつまで」続くことかと危惧しつつ陋屋にいるわが身を描く。この二条詠は、諸注「いつまで草」との関わりを指摘しないが、卷一の「いつまで草」の例で二条への院の「あはれ」がいつまでかと語っていたことと重ね合わせた反復表現である。

二条詠が表した寵の途絶えの予感はその後の展開で現実化する。該歌に続けて出産記事があり、その直後に有明の月が病によって急死すると同時に院は二条に出仕を以前ほど求めなくなり、心変わり「色変りゆく御事」が始まる。院以外の男達との契りが度重なり、龜山院と懇ろだという噂や東二条院の二条への勘気も手伝い、院は二条の出仕を禁じた。この物語展開を予言するはたらきが二条詠の「いつまで」には認められる。

第三の「いつまで草」は出仕禁止後、北山准后九十賀に大宮院の要請で参仕した卷三末の記事にみえる。

事始まりぬるにや、両院・春宮・両女院・今出川の院・姫宮・春宮大夫(実兼)うちつづく。(中略)舞を奏す。気色ばかりうちそそく春の雨、糸帯びたるほどなるを、厭ふ気色もなく、このもかにも並みたる有様、いつまで草のあぢきなく見渡さる。左、万歳楽・楽拍子

・賀殿・陵王、右、地久・延喜樂・納蘇利。

(賀の第一日)

九十賀に列席する後深草院、大宮院、東二条院などの主がたや、西園寺実兼(雪の曙)などの廷臣の名を書き連ね、舞樂の次第を坦々と記録する合間に、賀宴に列なる宮廷の人々のさまが「いつまで続くことやら」と冷めた目で眺める二条を描く。盛儀に参仕していても祝意に溶け込めず、宮廷の華やぎをかりそめのものと感じる二条の心を表す。賀の第三日には「世の中の華やかにおもしろきを見るにつけても、かき暗す心の中は、さし出でつらむも悔しき心地」と、出仕を後悔したとも語る。

その感慨は九十賀の前の記事で出家を思い立ったことと関わる。出仕停止後に祇園に参籠し、「今はこの世には残る思ひもあるべきにあらねば、三界の家を出でて解脱の門に入れたまへ」と祈願していた。宮廷から一度斥けられ、世を捨てる心づもりの二条は、宮廷の宴と、それに仕える女房としての自己をもはや終わりの近い存在と諦観したのである。

賀の第三日には、院が二条に再び寵意を示す文を届け、船樂への出仕を命じ、自ら二条の装束を整えた。「いつよりまたかくもなりゆく御心にか」と、出仕を止めたことを

忘れたかのごとく豹変する院の心が描かれる。九十賀の記事の末尾では院から「たびたび御使」があったが、二条は「さし出でむ空なき心地」がしたという。主君の移り気を厭い、再出仕の誘いに応じる気になれなかったことを巻三結尾に語る。

「いつまで草」は、主君の寵を頼む宮仕えがかりそめのものであり、いつかは捨て去らなければいけないという予期を示す表現として、巻三までの記事に反復された。出家後を描く巻四以降には用いられない表現であり、二条が院への宮仕えに見切りをつけて世を捨てるまでの軌跡を語る上で重要な表現である。

三

「いつまで草」は宮仕えの行く末の不安と予感を表したが、同じく二条の身の行方への危惧を表す歌語表現を検討する。巻一における「いつまで草」の第一例の場面に立ち戻る。

「いつまで草の」とのみおぼゆるに、御匣殿さへ、この六月に産するとして失せたまひにしも、人の上かはと恐ろしきに、大納言の病のやう、つひにはかばかしからじと見ゆれば、「何となるみの」とのみ嘆きつつ、(後

略)

「何となるみの」は、諸注指摘するように『続古今集』
髷旅934歌による。

鳴海寺にてかき付け侍りける 藤原光俊朝臣

あはれなり何となるみの果てなればまたあくがれて浦
伝ふらん

第二句が身のなりゆきを不安と共に自問するのをふまえ、
二条が院の寵を疑いながら出産による死と父の死を恐れて
身の行く末を自問するさまを表す。該歌は鳴海の浦をさま
よう旅の歌であり、第二句以外は二条の境遇とは異なる。
既成の歌の一部を引いてそれ以外の部分の表現・内容をも
重ね合わせる引歌とは違い、該歌の一句のみをふむ表現で
ある。『とはずがたり』は引歌によつて、引いていない部
分や引歌の詠者(物語の人物や西行などの歌人)の境遇をも
ふまえることが多いが、既成の歌のフレーズだけを借り、
またはその歌句を変形して用い、固有の境遇を語ることも
ある。ここでは「なるみ」に関わる表現の反復が二条の身
の上を語る独特の方法と化すことを捉えたい。

『続古今集』では右の934歌の前の933歌が阿仏尼の鳴海の
歌である。

思ふこと侍りける頃、父平度繁朝臣、遠江の国に

まかれりけるに、心ならず伴ひて、鳴海の浦を過
ぐとて、詠み侍りける 安嘉門院右衛門佐
さても我いかななるみの浦なれば思ふかたにはとほざ
かるらん

阿仏尼が物思いを抱いて遠江に下向した際にわが身の行方
を自問した歌であり、第二句は934の光俊詠と似るため、『と
はずがたり』は阿仏尼詠も連想していたのではないか。

阿仏尼詠は『うたたね』でも遠江に下向した女が詠んだ
とされている。

鳴海の浦の潮干潟、音に聞きけるよりもおもしろく、
(中略) 思ふことなくて、都の友にもうち具したる身
ならましかばと、人知れぬ心の中のみ様々苦しくて、

これやさはいかになるみの浦なれば思ふかたには
遠ざかるらん

女の歌は「思ふかた」即ち都を離れ、都で別れた恋人とも
遠ざかり、鳴海をさまよう身の先が見えない不安を表す。
『うたたね』は女が身の行く末を自問する表現が多い。恋
人の訪れが途絶えがちな頃、来意を告げる文が届いて期待
を抱く女は「あだなる身の行方、つひにいかになり果てん
とすらむ」と、はかない恋にすぎる身の行方を自問する。
遠江へ出立する日にも「いかにさすらふる身の行方にか」

と、あてもなくさまよい出る身の行く手を自問し、旅先でも身の行く末を思い定められない。都の旧居に戻っても、「なりゆかん果ていかが」と、身の行方への疑問を抱いたままの女の姿が結尾に描かれる。『うたたね』と『とはずがたり』は身の行方を追尋する表現を有する点で同じ系譜に位置づけられる。

「なるみ」に関する前掲歌を意識して二条の身のなりゆきの不安を語る表現は、巻二で雪の曙の子を懐妊して着帯をする場面にも見いだせる。

（雪の曙は）帯を手づから用意して、「ことさらと思ひて、四月にてあるべかりしを、世の恐ろしさに今日までになりぬるを、御所より、十二日は着帯のよし聞くを、ことに思ふやうありて」と言はるるぞ、心ざしもなほざりならずおほゆれども、身のなりゆかむ果てぞ悲しくおぼえはべりし。

雪の曙の子を皇子と偽ったため、院と雪の曙による二重の着帯がなされる場面で、二条は「身のなりゆかむ果て」を案じる。院に対する後ろ暗さ、産む子の処置に関する心配、雪の曙との契りの不安を抱いて、身のなりゆきを危惧する表現である。

光俊詠との関連は検討されていないが、同歌の「何とな

るみの果て」を響かせた表現であろう。同歌が引かれたのは皇子懐妊の場面であり、当該場面も雪の曙の子の懐妊中である。皇子懐妊時は父の死後に遺される身の行く末を危惧し、雪の曙の子の懐妊中も、院による着帯に際し、皇子懐妊中に着帯を院の配慮でなした時の父の喜びを思い返して哀しんだ。父の死の影を帯びた懐妊場面で身のなりゆきを案じる表現が反復されている。

雪の曙の子を密かに産んだ記事の直後に、皇子の夭折が語られる。

身の過ちの行く末はかばかしからじと思ひもあへず、神無月の初めの八日にや、「しぐれの雨の雨そそき、露とともに消え果てたまひぬ」と聞けば、かねて思ひまうけにしことなれども、あへなくあさましき心の内、おろかならむや。

雪の曙の子を産んだ「過ち」が悪い事態につながる予感が当たり、雪の曙の子とひきかえのように皇子を喪った「愛別離苦」を語る。雪の曙の子の着帯時に危惧した「身のなりゆかむ果て」は皇子の死という事態に至った。身のなりゆきに関する表現は、二条が恩愛を抱く者たちの死の予感を表す傾向があり、「いつまで草」が無常を表し、二条の父の死の恐れを表していたことと通底する。

四

「なるみ」に関する表現を以後、「なるみ」表現と呼ぶが、同表現は卷三の有明の月との逢瀬の場面にもみられる。

明日はこの御談義結願なれば、今宵ばかりの御なごり、さすがに思はぬにしもなきならひなれば、夜もすがらかかる御袖の涙も所せければ、何となりゆくべき身の果てともおほえぬに、かかる仰せ言を（有明の月は）つゆ違はず語りつつ、「なかなかくては便りもと思ふこそ、げになべてならぬ心の色も知らるれ。不思議なることさへあるなれば、この世一つならぬ契りも、いかでかおろかなるべき。（院）『二筋に我撫でおほさむ』とうけたまはりつるうれしさも、あはれさも、限りなく。さるから、いつしか心もとなき心地するこそ」（後略）

院が有明の月と二条の仲を許し、産まれる子の世話まで引き受けるという「仰せ言」を有明の月は二条に告げる。子までなした契りに感じ入った有明の月が「心の色」即ち愛執を深めてゆくのに対し、二条は「何となりゆくべき身の果て」と危惧した。この表現は光俊詠によるかと注釈されている。卷一の皇子懐妊時の同歌引用と同じく二条が懐妊中に行く末を危ぶむ表現であり、光俊詠による「なるみ」

表現と捉えてよいだろう。当該場面では有明の月の愛執に加え、院が二条を待つて独り寝をしていたと妬み、三つ巴の愛憎が描かれる。愛執の渦中で惑乱する身の上を自問する「なるみ」表現である。

「なるみ」表現に伴い、卷一では父の重病について「つひにはかばかしからじ」と危惧し、雪の曙の子の出産について「身の過ちの行く末はかばかしからじ」と危ぶんだように、有明の月に関する右掲場面直後でも、院の嫉妬に苦しみつつ「つひにはかばかしかるまじき身の行く末」となる予感に襲われる。予感は死につながる傾向があり、有明の月の子を産んだ直後にも有明の月の急死が語られる。有明の子が院の手配で表向きは死産とされ、院の某寵人の子として引き取られたのが十一月六日であり、続く十三日の記事では有明の月が流行病で死ぬことを自ら予感し、十八日には発病、二十五日に死去という急展開となる。「なるみ」表現によって不安を示した後に子が産まれ、同時に死者が生じるといふ展開は、雪の曙の子の出産記事と同じである。「なるみ」表現は、二条が男との契りと出産においてくりかえしみまわれた愛別離苦の予兆を示すのである。

卷三までの「なるみ」表現をみてきたが、卷四において

は鳴海を旅した折の歌がある。

卷四冒頭、熱田社の御垣の内の桜が盛りなのを見て、次の歌を書いた札を社の杉に打った。

春の色も弥生の空に鳴海瀉いまいくほどか花も杉村

この歌では晩春の空に「なる」につれ花の盛りが過ぎゆくのを惜しんでおり、「なるみ」表現が我が「身」のなりゆきを問うたのとは異なる。

伊勢で外宮祠官の度会常良と別れ、熱田へ向かう時の贈答にも鳴海が詠われる。

立ち帰る波路と聞けば袖濡れてよそに鳴海の浦の名ぞ
憂き
(度会常良)

かねてよりよそに鳴海の契りなれど返る波には濡るる
袖かな
(二条)

伊勢で歌交をした二人が別れを惜しむ贈答であり、諸注関連歌を挙げないが、「よそに鳴海」や「袖」を濡らすという恋歌の表現は、松屋本『山家集』「恋の歌五首よみけるに」、思ひきやよそになるみのうらみして涙に袖をあらふべ

しとは
という西行詠を連想しているだろう。⁽¹⁾ 西行和歌の影響については、後述する。

「なるみ」表現から鳴海の歌への推移は、宮仕え期に自

己の行く手を恐れて問い返していた二条像から、旅路で季節の移ろいを感じて人と心を通わせる二条像への変容を示す。

五

有明の月に関する「なるみ」表現がみられた前掲巻三の場面で、有明の月が二条に示した愛執を「心の色」と表していた。

何となりゆくべき身の果てともおほえぬに、かかる仰せ言を（有明の月は）つゆ違はず語りつつ、「なかなかかくては便りもと思ふこそ、げになべてならぬ心の色も知らるれ。（中略）我も通ふ心の出で来けるにや。これ、逃れぬ契りとかやならむ（後略）

「心の色」は作中に六例あり、概ね院・雪の曙・有明の月が二条に思いのたけを語る場面で「情愛」を表す。「いつまで草」や「なるみ」など、院らとの契りの不安を表す歌語に加え、「心の色」も契りを表す歌語として検討したい。『うたたね』にも一例あり、女が法金剛院で「木々の紅葉色々に見えて、松にかかれる枝、心の色もほかには異なる心地して」という例である。「心の色」は勅撰集の恋歌に用例が多く、『うたたね』の例も紅葉の色とともに女の恋

心を表すことが指摘⁽¹²⁾されている。

歌語辞書の「心の色」の解説は「本来無色である心をあえて色あるものに見立てる語」とし、勅撰集では『後撰集』が初出で、飛んで『千載集』以下に例があり、慈円、西行、定家など新古今歌人が多用したと指摘する。

『後撰集』恋三⁷³⁵の「五節の所にて、閑院のおほい君につかはしける」師尹の歌、

ときはなる日かげのかづらけふしこそ心の色にふかく
見えけれ

は『古今和歌六帖』「ひかげ」³⁹³²と同歌であり、恋の深い「心の色」を伝える点は『とはすがたり』の用法と共通する。勅撰集では『千載集』から『続後撰集』まで各一、二首ずつ例がみられるのに対し、『続古今集』には八例あり、以降の『新後撰集』四例、『玉葉集』二例と比べても突出して多いことが注目される。⁽¹⁴⁾『続古今集』入集歌には『とはすがたり』に登場する人物や関係者の歌があり、例えば後嵯峨院も贈答で「心の色」を詠う。

しぐれのみおとはのさとはちかけれど都の人のことづ
てはなし

(雑上1610山階実雄)

とはずともおとはのさとはつしぐれ心の色はもみぢ
にもみよ

(1611後嵯峨院)

『とはすがたり』は『新古今集』、『古今集』について『続古今集』入集歌を多くふまえていることが指摘⁽¹⁶⁾されており、「なるみ」表現も『続古今集』歌によった。「心の色」も特定の典拠歌は見いだせないが、『続古今集』に頻出する「心の色」の影響が考えられる。

卷一では雪の曙が二条に「年月の心の色をただのどかに言ひ聞かせむ」と思いを訴え、初めて契りを結ぶ。雪の曙が語った「心の色」の内容は述べられていないが、卷一冒頭から二条に恋文を送り、二条の父の四十九日中の弔問でも恋情を示しており、その思いのたけを「心の色」と表したのであろう。

恋の「心の色」を相手に告げる類例である『続古今集』恋一「初恋の心を」⁹⁵¹土御門院、

くれなるのこそめの衣ふりいでて心の色をしらせつる
かな

は濃い紅の衣のように深い恋の「心の色」を知らせたとする。

散文では中世以降の作品に用例が見いだせ、⁽¹⁷⁾『十訓抄』八序の忍ぶ草に関する説話に、

花園左大臣、かの草の紅葉につけて、心の色をあらはし給ひけむもやさしくおほゆ。

と、恋心を知らせる類例がある。『新古今集』恋二 1027 源有仁「わが恋もいまは色にやいでなまし軒のしのぶも紅葉しにけり」を「心の色」の告白の歌とする。

有明の月の「心の色」の例に戻ると、有明の月は仁和寺御室、性助法親王に比定されており、性助の「心の色」の歌が『続千載集』雑上 1800 1801 の龜山院との贈答に見いだせる。

雪のふかくつもりて侍りけるに、性助法親王のも
とにつかはされける

昔より今もかはらずたのみつる心の跡ぞ雪にみるべき

御返し 入道二品親王性助

たのみつる心の色の跡みえて雪にしらるる君がことの

は

龜山院が性助を信頼する「心の色」を性助は詠う。該歌を二条が知っていたかは不明だが、性助の和歌の口吻と重なる有明の月の「心の色」に応じ、二条は「通ふ心」、「逃れぬ契り」を感じ、身のなりゆきを恐れつつも契りを深めてゆく。

六

院に関する「心の色」が巻三から四にかけて四例あり、「いつまで草」が巻三の院の心変わりに至る予感を表したのに

対し、「心の色」はその変心から巻四の再会に至る宿縁を示す表現として重要である。巻三で院は二条に対する「心の色」、つまり寵愛を語る。

「人より先に見初めて、あまたの年を過ぎぬれば、何事につけてもなほざりならずおぼゆれども、何とやらむ、わが心にもかなはぬことのみにて、心の色の見えぬこそいと口惜しけれ。わが新枕は故典侍大にしも習ひたりしかば（中略）腹の中にありし折も、心もとなく、いつかいつかと、手の内なりしより、さばくりつけてありし」

院の「心の色」語りは有明の月の二条に対する愛執に院が気づいたことを契機とする。院は二条に有明の月の愛執に応えるように命じた後に右の「心の色」を語る。院の「心の色」語りは、二条を「人より先に見初めて」と、有明の月よりも誰よりも先に寵愛を施したと切り出される。院は有明の月の愛執を許容しながら、それに半ば対抗して、自らの「心の色」を語った。その後、有明の月が「心の色」を語る既掲場面に至り、二人の「心の色」の板挟みとなった二条の不安が「なるみ」表現で示されることになる。

院の「心の色の見えぬ」という言葉づかいは、前掲『後撰集』735「心の色にふかく見えけれ」、『続古今集』恋二 1072

大納言通成「なかなかにてさても心の色見えばあふにはかへて身をやすてまし」等とある歌語表現であり、二条への寵を十分に伝えきれない恨みを示す。

院は二条に対する「心の色」が、新枕の相手であった二条の母の「典侍大」（四条隆親女、大納言典侍）への思慕に由来すると明かし、二条が生まれる前から寵する意向であったことを告げる。院の「心の色」語りは二条の生い立ちまでさかのぼる昔語りを特徴とする。雪の曙や有明の月の「心の色」語りでは二条の母の代まではさかのぼれず、院は他の男よりも根深い宿縁を有することを対比的に描き分けている。

院の「心の色」は、有明の月への對抗心によって語られたが故に、有明の月の急死とともに移ろう。その変心は既述したように「いつまで草」の表現で予感された通り実現した。巻四では旅する二条が都の院を追慕するさまが武蔵野紀行などで描かれ、その思慕に呼応するように院との再会が石清水八幡で実現したことが語られる。石清水における院の語りで再び「心の色」が示される。

「ゆゆしく見忘れぬにて、年月隔たりぬれども、忘れざりつる心の色は思ひ知れ」などより始めて、昔今のことども、移り変はる世のならひあぢきなくおぼし

めざるるなど、さまざまうけたまはりし（中略）はしたなく明けぬれば、「さらばよ」とて引き立てさせおはしましぬる御なごりは、御跡なつかしく匂ひ、近き程の御移り香も、墨染の袂に留まりぬる心地して、人目あやしく目立たしければ、御形見の御小袖を墨染の衣の下に重ねるも、便なく悲しきものから、

重ねしも昔になりぬ恋衣今は涙に墨染の袖

院の「心の色」語りは「昔今」の思い出語りを含み、その内容は詳述されないが、「いはけなかりし世のことまで数々仰せありつる」ともあり、巻三の「心の色」語りと同様に二条との契りを懐古するものであっただろう。別れ際に院から「御肌に召されたる御小袖を三つ」、「形見」として下賜された二条は、語らいの「なごり」を惜しみ、院の「移り香」を慕い、歌で院と「恋衣」を重ねた「昔」を偲ぶ。この別れの描写は、遙か昔の巻一で、二条が父の喪に服している頃に籠もった醍醐寺に院がお忍びで訪れた際の後朝の表現を反芻しているだろう。

今宵はことさらこまやかに語らひたまひつつ、明けゆく鐘にもよほされて、立ち出でさせおはします。（中略）「またよ」とて出でたまひぬる御なごりは、袖の涙に残り、うち交はしたまへる御移り香は、わが衣手に染

みかへる心地して、(中略)明けぬれば、文あり。「今朝の有明の名残」は、わがまだ知らぬ心地して」などあれば、

君だにもならはざりける有明の面影残る袖をみせばや

卷四の二条は「墨染」の衣の尼であるにも関わらず、卷一の「昔」の「恋衣」を再びまとして院と逢瀬を持ったかのごとく表現されている。逢瀬の回想表現を引き出したのが卷四の院の「心の色」を示す昔語りであった。卷三で院の「心の色」が変じた後、卷四の旅を経て再び院の「心の色」にふれて昔の契りに立ち帰る二条の心が描かれている。

七

石清水での院の「心の色」語りに呼応して、二条の側からも院に対する「心の色」が伊勢の内宮における詠歌で示される。

「この御社の千木は、上一人を護らむとて上へ削がれたる」と聞けば、何となく、「玉体安穩」と申されぬぞ、我ながらいとあはれなる。

思ひそめし心の色の変はらねば千代とぞ君をなほ祈りつる

石清水から熱田を経て伊勢に参った二条は、院の玉体のつがなきことを祈願して右の歌を詠んだ。一首は院への思慕を「心の色」と表し、院の長久の栄えを祈る。

二条詠の上の句は、西行の『御裳濯和歌集』秋上290の歌と類似する。

おもひそむる心の色もかはりけりけさあきになるゆふぐれのそら

西行詠の第三句が立秋にともなう変化を表し、二条詠が不変の主君思慕を表すのは対照的だが、二条は西行を意識して該歌を詠んだのではないか。西行の「心の色」の歌は多く、二条詠に類似する例として、松屋本『山家集』「恋の歌五首よみけるに」

君に染し心の色のうらまでもしほりはてぬるむらさきの袖

や、『山家集』恋百十首¹³⁴²、

君にそむ心の色のふかさにはほひもさらに見えぬなりけり

も見いだせる。これらの西行詠が「君」への恋に染まった「心の色」の深さを表したのをふまえ、二条は主君への思慕に染め上げられた「心の色」を詠ったのである。²⁰

二条詠以外の「心の色」の作中例は全て二条に対する男

の思いを表すが、伊勢では例外的に二条から院への「心の色」が詠われた。石清水で院の「心の色」に接して募った思慕を伊勢で主君の守護神に誓うに至る二条の心の高揚が表されている。

伊勢からの帰京に続けて、巻四末に伏見殿における院との語り合いの記事が配され、「心の色」の最後の例は対話末尾にみられる。院が二条の修行中の男との関わりを疑い、二条は契りを結ぶことはなかったことを誓い、院一人を慕う衷情を訴える。院の「御陰に隠されて、父母に別れし恨みも、をさをさ慰みはべりき」と、父母を亡くした身に寵愛を賜った恩に謝した。院の返答は次のように語られる。

何にも、人の思ひ染むる心はよしなきものなり。まことに、母におくれ、父に別れにし後は、我のみはぐくむべき心地せしに、事の違ひもてゆきしことも、げに浅かりける契りにこそと思ふに、かくまで深く思ひそめけるを知らずがほにて過ぐしける（中略）還御の後、思ひかけぬあたりより、御尋ねありて、まことしき御訪ひおぼしめしよりける、いとかたじけなし。思ひかけぬ御言の葉にかかるだに、露の御情けも、いかでかうれしからざらむ。いはんや、まことしくおぼしめしよりける御心の色、人知るべきことならぬさへ、置き

所なくぞおぼえはべりし。

院は二条の親代わりを果たせなかったことを悔やむ昔語りとともに二条の思いに気づかなかったことを詫び、「まことしき御訪ひ」（二条の修行・生活への援助）まで施す「心の色」を示した。

以上のように、院と二条の「心の色」の呼応によって縁の確かめ合いを描くことが巻四の重要な表現志向である。旧主の「心の色」に染められて昔の契りを思い出し、自らも「心の色」を祈誓し、一度断られたえにしを結び直す二条の心の旅が巻四に描かれている。

おわりに

『とはすがたり』で反復される歌語表現について検討した。「いつまで草」は院の変心の予感を表し、「なるみ」表現は懐妊中の身のなりゆきの不安を表して愛別離苦につながり、共に男たちとの契りにおける二条の苦難を予示した。苦しみを予期しながらも、男たちが示す情愛を受け容れ、自らも示し、その宿縁を感じる二条像が「心の色」によって表現された。三つの歌語は『とはすがたり』がこだわる二条と人々の契りや死別という枢要なテーマを担った表現なのである。

歌語の反復は本作が二条の身の上を語る上で重要な表現方法であり、他の歌語についてもその意義を今後検討したい。⁽²⁾

【注】

(1) 岩佐美代子『「とはずがたり」読解考 五 小夜衣』『宮廷女流文学読解考 中世編』(笠間書院、一九九九年)は、歌語「小夜衣」について表現史と作中和歌で反復される意義を指摘する。

(2) 福田秀一「いつまで草」と「安の河原」——「とはずがたり」注解補正その二——『解釈』二七卷一号(一九八一年一月)は諸注の解釈を不安と願望に二分し、文脈上不安と解するべきと指摘。三角洋一「とはずがたり たまきはる」(岩波書店、一九九四年)、久保田淳『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館、一九九九年)は不安・疑問と解する。

(3) 『新編国歌大観第四卷』(角川書店、一九八六年)の『堀河百首』解題(橋本不美男・滝澤貞夫)によれば、該歌は雑廿首「山家」¹⁴⁸⁹公実「霜がれの草の戸ざしのあだなれば賤の竹がき風もたまらず」の異伝歌である。

(4) いつまで草を詠む和歌はきりぎりすと併せて晩秋の情趣や無常観を表す例が多く、鎌倉期までに『月詣集』九月「暮

秋間菘」773寛延法師、『千五百番歌合』秋二1269源通親、『東撰六帖』抜粹本・秋247源光行、『夫木抄』「夏虫」³⁷³⁷順徳院、『光経集』572無常、『隣女集』「壁底虫」²⁰⁵⁸、『宗尊親王百五十番歌合』159時直、『現存和歌六帖』「きりぎりす」³⁴²式乾門院御匣がある。なお、『山家集』「雨中虫」461「かべにおふるこぐさにわぶるきりぎりすしぐるるにはのつゆいとふべし」もいつまで草を詠む。久保田淳『和歌植物誌』⁽¹⁶⁾(和歌文学大系月報16二〇〇二年七月)は歌のいつまで草をマンネングサと推定。

(5) 三角洋一(注2前掲書)は「引歌あるか」とし、『枕草子』や物語の例を挙げる。

(6) 松村博司『榮花物語全注釈三』(角川書店、一九七二年)参照。

(7) 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進『榮花物語二』(小学館、一九九七年)参照。

(8) 市古貞次・三角洋一『鎌倉時代物語集成別巻』(笠間書院、二〇〇一年)の引歌索引に、『浅茅が露』のいつまで草の例を指摘。物語冒頭の三位中将の紹介で、道心深い中将は現世を「かりそめなるもの」と観じ、常々「壁に生ふる草の名」即ちいつまで草のようにいつまで現世に在るか定かでないと言うため、父大臣は出家を恐れて道心を制したという。『若の衣』と同じくいつまで草は「かりそめ」の世の象徴だが、

他の物語と違って夫婦仲には関わらない。

- (9) 久保田淳「とほすがたり」(小学館、一九八五年)、三角洋一(注2前掲書)の注を参照。

- (10) 本文は久保田淳『西行全集』(日本古典文学会、一九八二年)所収「松屋本書入六家集本」により、清濁・表記を私意で改めた。該歌は松屋本にのみ存する。

- (11) 「よそになるみ」という句は、『新古今集』冬649藤原秀能「風吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ波になく千鳥かな」の他、『建保名所百首』恋・鳴海浦の歌などにもあるが、それに加えて「袖」が濡れるという表現は西行詠と二条らの贈答の共通点として特徴的である。

- (12) 渡辺仁作「心の色」『解釈』三三卷九号(一九八七年九月)参照。

- (13) 松村雄二「心の色」(『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年)参照。

- (14) 『統古今集』以外の勅撰集の「心の色」歌は、『千載集』恋四892小待従、『新古今集』神祇1891慈円、『新勅撰集』(秋上205通親、雑二1154西行)、『統後撰集』(恋四922資季、雑上1097前太政大臣)、『新後撰集』(春上66隆衡、秋上429前関白太政大臣、釈教640為方、恋五1150行念)、『玉葉集』(春下169清輔、哀傷2359西行)。

- (15) 雪の曙こと西園寺実兼の祖父実氏の歌「このはるぞ心の色

はひらけぬるむそちあまりの花はみしかど」(賀1867↓正元元年(一二五九)大宮院一切経供養時の詠〔増鏡〕おりある雲)もある。その他の『統古今集』入集歌は、春下106藤原行家、恋一951土御門院、恋一953前大納言忠良、恋一964宗尊親王、恋二1072大納言通成、恋三1193紫式部。

- (16) 渡辺静子「とほすがたり」における和歌撰取の位相「中日日記文学論序説」第二章第二節(新典社、一九八九年)、久保田淳「とほすがたり」(小学館、一九八五年)の「引歌一覧」参照。

- (17) 『無名草子』消息文論「うち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし」、『徒然草』二四〇段「くらぶの山も守る人滋からむに、わりなく通はん心の色」(無理に通う程の情愛)等。

- (18) 有明の月と性助の和歌の関わりは、「心の色」は検討されていないが、富倉徳次郎「とほすがたり」四一三頁(筑摩書房、一九六九年)が「有明の月」の名は性助が「有明の月」を詠んだ『統拾遺集』956などに由来すると推定し、次田香澄「とほすがたり全訳注 下」四九一頁(講談社、一九八七年)は性助和歌と二条との恋の関連性を示唆する。

- (19) 『山家集』616 785 1322 1342、『西行法師家集』72 273 276 514 543、『聞書集』144等、全十二例。『聞書集』107詞書で某男が深く契った女の

死後「心の色変りて」申わなかつたという例もある。

- (20) 二条は幼時から西行とその和歌を憧憬しており(巻一)、西行が伊勢に住んで和歌活動をしたことを意識して、同地で西行詠をふまえたと考えられる。西行の影響はなお別途考察したい。

- (21) 当該場面が続けて、二条の内心として、「昔より何事もうち絶えて、人目にも、「こはいかに」などおぼゆる御もてなしもなく」と、院から殊遇を受けた「思ひ出で」がないと言付記される。院との宿縁を確かめたとはいえ、院の変心に左右された宮仕えの恨みも一抹残る。

- (22) 中世和歌で遁世の善知識を表す定型句「憂きはうれし」が「とはずがたり」で反復される意義につき、拙稿『とはずがたり』巻二の「傾城」と二条「遁世をめぐって」、『日記文学研究誌』一四号(二〇一三年十月)で検討した。

*引用本文は、『とはずがたり』『栄花物語』『十訓抄』『無名草子』『和漢朗詠集』は新編日本古典文学全集、『徒然草』は新日本古典文学大系、『苔の衣』『浅茅が露』は中世王朝物語全集、和歌と歌番号は新編国歌大観によったが、各本文の表記は私意で改めた。『うたたね』は影印校注古典叢書(伊東章次蔵本)によるが、群書類従本によって一部校訂した。